

児童期の愛他行動と共感性に関する発達的研究

A developmental study on altruistic behaviours and on empathy in the childhood

浅川 潔 司* 八 尋 義 晴** 浅川 淳 司***
ASAKAWA Kiyoshi YAHIRO Yoshiharu ASAKAWA Atsushi

本研究では、質問紙調査法を用いて、児童期における愛他行動の発達について、公立及び私立小学校の差異を中心に検討された。近畿圏の公立小学校の児童（4年生・6年生）の計407名（公立196名、私立211名）が研究協力者として参加した。児童の共感性の測定のためには、浅川・松岡（1984）及び桜井（1986）を参考に作成された共感性尺度が、そして、愛他行動の測定のためには、バス（1991）の見解に準じた尺度が構成されて使用された。収集された資料は、2（私立・公立）×2（学年）×2（性）の要因計画の下に分析された。主な結果は以下の通りであった。

- (1) 愛他行動得点に関しては、共感性得点との間に中程度の正の相関が見られた
- (2) 愛他行動得点の分散分析の結果から、校種と学年の有意な交互作用が認められ、公立学校の児童群においては学年間に有意差は生じていなかったが、私立学校の児童群では、4年から6年にかけて当該の得点が著しく低下していた。また、私立校の得点は4年生では公立校よりも有意に高いが、6年になると差があるとはいえない状態になることも明らかとなった。
- (3) 女子群の愛他得点が男子群のそれを有意に上回っていた。
- (4) 共感性得点に関しても、校種と学年の相互作用が有意であり、公立校の学年差は有意ではないが私立校では、4年生から6年生にかけて顕著に低下していた。

これらの事実に関して、発達心理学的な観点から、そして学校心理学的な観点から考察がなされた。

キーワード：愛他行動、共感性、発達、児童期

Key words：Altruistic behaviors, Empathy, Childhood, Development

問題と目的

怪我をしている友人を保健室に連れて行くとか、電車の中で老人に席を譲るなどの行動や小さな親切行動から、駅のホームから転落した人を救おうとして自らの命を捧げた勇敢な人の行動に至るまで、これらを向社会的行動（prosocial behavior）とよび、愛他行動（altruistic behavior）ともいう。

愛他行動は、多くの研究者によって定義の整理が試みられてきた。「外的な報酬を期待しない」「他者の利益になる」「自発的」「自己犠牲を伴う」などの表現が使われているが、研究者によって異なっている。その理由として、Eisenberg（1982）は、定義の内容に向社会性や愛他性といった価値を含むため、操作的定義に留まらず、概念的、理論的要素を含まざるを得ないからであるという。

そこで、本研究では、これらの見解を踏まえ、愛他行動を、首藤（1994）、川島（1991a）らがいう「外的な報酬を期待することなしに、他者の利益や福祉のためになされる自発的な自己犠牲を伴う行動」の4つの条件とともに生得的な「愛他心」を包括した概念とし、向社会的

行動の中の純粹性を含む高次の行動として位置づけることとした。

これまで愛他行動については、「個人内要因」としての共感性、役割取得能力、判断力、自己制御力、気分等についての研究や、外的な「状況要因」としての緊急性の程度、時間的余裕、他者の存在の有無、親密度、コスト、非実行者の性別や年齢などによる研究、あるいはそれらの相互作用による研究によって検討されてきた。

菊池（1983）は、それまでの研究を概観し、向社会的行動モデルを作成している（Figure 1 参照）。「気づき」から「媒介過程」を経て「意思決定」し、「行動」するという基本的構造の一連の流れを示し、気づきと意思決定を媒介する「媒介過程」の要因として、「向社会的判断」「役割取得」「共感性」の3つを相互に関連があるとする基本的な枠組みを呈示している。さらに媒介過程に影響を与えるものとして、「社会化変数」「状況変数」「援助を求めている個人の特徴」「文化的変数」を挙げている。この菊池モデルの向社会的判断の箇所を愛他行動判断と置き換えても、基本的な構造は同一と考えられよう。

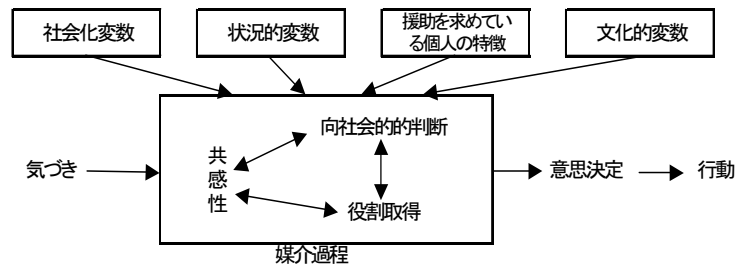


Figure 1 向社会的行動モデル (菊池 1983より)

首藤 (1985a) は、幼稚園年長児に分与行動実験を行って、自己志向的理由付け条件の子どもより他者志向的理由付け条件の子どもの方が分与行動が多かったことから、大人の在、不在という外的要因に影響されることなく他者志向的理由付け条件が愛他的な分与行動を動機づけるという。

また川島 (1991a) は、愛他行動の年齢的变化をみるために、愛他行動に属する寄付行動、救助行動、援助行動の3種類について、幼稚園児、小学2・4・6年生を被験児として実験を行っている。その結果、寄付行動と援助行動は、4年生から6年生にかけて有意に上昇したことや、救助行動は4年生と6年生の間で男子のみ有意であり、寄付行動は女子群に有意に多く、加齢とともに増加していたことを報告している。さらに川島 (1991b) は、愛他行動の動機 (①社会的報酬、②物的報酬、③内在化された自己報酬) について、同様に3種類 (寄付、援助、救助) についての実験を、別の同じ年齢の園児、児童に対して行っている。その結果、寄付行動は、自己強化を動機とする児童が年齢に従って増加するが、6年生で減少していたこと、援助行動では、他学年では見られない物的報酬を動機付けの基礎とする児童が6年生に見られたこと、救助行動では、社会的な強化を動機の原因であると考えられる児童が増加していたことを報告している。このように、愛他性の種類によって、異なった様相を呈する機序が働いている。

また、愛他行動の性差が見られなかったとの報告もあれば、女子のほうが男子より愛他行動を多く示したとの報告もある。例えば、広田 (1995) は、小学校5年生 (1学級) の児童の学級内での愛他行動を5ヶ月間にわたって観察 (VTR) している。こ間の観察と質問紙 (「教師評定」と「自己評定」と「相互評定 (ゲス・フーテスト形式)」) による調査の結果から、質問紙による評定と観察された愛他行動の評定との間に有意な相関を見出しているが、「分からない問題を教える」、「物を貸す」という行動がほとんどで、教室内という制約のためか愛他行動の出現回数は少ない (合計: 33回) と報告している。しかし、広田 (1995) は、出現回数は少なかったものの女子のほうが男子より多かったことから、愛他行動の種類と性の関連が推測できるとしている。

江口・安里・川島 (2003) は、幼稚園年少児、年中児、年長児、小学2年生、4年生を対象に、返却期待の有無条件を設定して、貸与行動について検討している。その結果によれば、女兒の愛他行動判断は2年生で一時的に男児より多くなり、男児は、女兒に2年遅れて同水準になることから、男児と女兒とでは、その発達過程に差があると解釈している。

松井 (1991) は、情緒的愛他反応と理性的愛他反応を規定する個人要因と環境要因について、大学生と高校生を対象に質問紙調査法によって検討している。その結果、情緒的愛他反応が多く親子関係 (特に母親) と関連が深いこと、また、他者志向的な理性的愛他反応は学校教育と関連が深く、愛他性の道徳的判断・規範意識を積極的に学校で教えることが重要であると述べている。

Eisenberg (1992) は、サンフランシスコ湾地域の3つの小学校で5年間 (1982年開始) 実施された「児童発達プロジェクト」 (共同的活動、社会的理解を促す活動、向社会的価値を高める活動、援助活動、発達のしつけの5要素) の結果、プログラムを実施されていない子どもたちと比較して、参加した子どもたちがより支持的で友好的な行動を示し、より自発的に援助し、協力し、気遣うことをしたと、その効果を紹介している。

愛他行動の動機付けの内的要因といわれる共感性 (empathy) について、Hoffman (1975)、Mussen & Eisenberg-Berg (1980) らの多くの研究者は、認知能力、役割取得能力の発達とともに幼児期から発達すると指摘している。

共感性については、「認知的理解を強調する立場」と「情動的反応を強調する立場」の2つの立場で論じられてきた経緯があったが、Mussen & Eisenberg-Berg (1980)、Hoffman (1982)、菊池 (1983)、浅川・松岡 (1987) らのいうように、現在では認知面と情動 (感情) 面を包括して定義されることが多い (例えば「他者の感情状態を認知することで、他者と同一ような情動経験をする」 (Feshbach, 1976))。

Bryant (1982)、桜井 (1986) らは、女子が男子より高い共感性を示したと報告をしている。これらは、質問紙を用いた調査法による研究という点で共通している。また、年齢の上昇とともに共感性は高まっていくという

Bryant (1982) の研究に沿った報告も北米では多くなされている。しかし、浅川・松岡 (1984, 1987) は、小学1・3・6年生を被調査者として質問紙調査を行い、その結果から、3年生から6年生にかけては共感得点が低下するとの結果を得ている。菊池 (1983) のいう日本社会独自の変数としての「ウチ」の人、「ソト」の人の説を引用して、ウチ集団への思いやりとソト集団への冷淡さや嫌悪という規範が6年生で内面化されたためとも考えられるとしている。浅川・松岡 (1984, 1987) の結果は、Bryant (1982) の研究結果とは異なる一面を示しており、また、文化背景の共感性に及ぼす影響の一端を示唆しているといえる。

首藤 (1985b) は、犠牲者の悲しみのビデオを視聴した被験者 (小学5年生) の顔の表情を観察して共感の程度を分析し、共感を示した被験者がゲームで獲得した賞品を犠牲者にどの程度寄付するかという問題について実験的に検討している。その結果によれば、情緒的共感を示した者の寄付が多かったという。今後、共感性と愛他行動の関係を組織的に検討するため、情緒的共感の持続時間だけでなく、悲しみの表情の外観化の手がかりの量やその程度を考慮することによって情緒的共感の強度も測定する必要があると述べている。

菊池 (1983) の向社会的行動モデルの説明からも、共感性が愛他行動の重要な先行要因の一つであろうとの推測は可能であるが、首藤 (1994) は、共感とは他者志向的な行動を喚起する機能を持ち、感情予期は他者志向的な行動の目標を愛他的な性質に発展させる機能を持つとして、「共感—感情予期—愛他行動」モデルを提唱している。(Figure. 2 参照)

他者のnegative状態に対して、「感情認知」と「感情の共有」という共感性の2側面の働きが喚起するが、共感とはそれ自体に愛他行動を動機づける機能を持っておらず、この間に他者志向的な行動を維持させる機能を持つ感情予期に媒介されることにより、愛他行動と関係づけられるとしている。感情予期は、自己の行動結果の予期という社会認知能力に依存しており、援助後の他者の喜びや幸福のようなpositive感情の予期と非援助後の他者の悲しみ、怒り、苦しみ、落胆のようなnegative感情の予期に分けられ、援助後、被援助者のpositive感情に対する自己のpositive感情と、援助前の自己の共感的心痛の低減というpositive感情の2つの感情過程を引き起こし、快感は先の愛他的感情予期を強化する方向に働くことになるという。幼児を対象とした実験において、特性共感と愛他的感情予期傾向が高い得点を示すことを見出している。

「3年生から6年生にかけて共感性が低下した」との浅川・松岡 (1984) の研究報告にあるように、小学校高

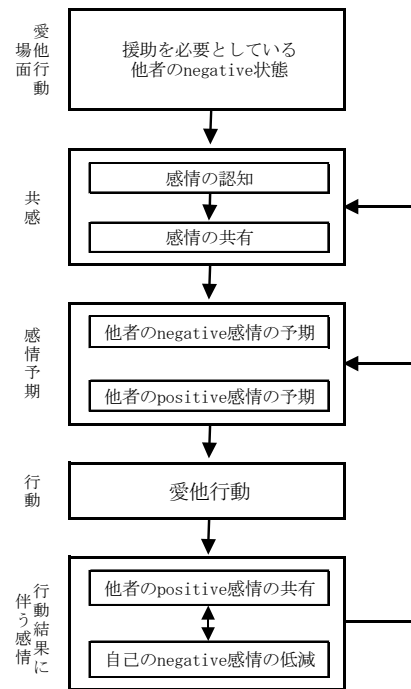


Figure 2 「共感感情予期愛他行動」モデル (首藤, 1994より)

学年の児童は、Piagetの発達理論にいう具体的操作段階から形式的早期への移行期である。

井上 (1986) は、小学校5年生を対象にした質問紙調査の結果から、学童期の子どもたちは、学業成績、級友や教師との関係、あるいは社会的な場面で失敗を体験することで自尊心の危機に直面しやすいと言う。そして、学歴偏重主義、相対評価による人間の序列化の甚だしい現状では、子どもたちは「秀れてはいない」「能力が低い」と判断され、「なんとはなしの劣等感」「強い挫折感」を早期に学校で獲得していると推測している。

学校生活上の心理的ストレスについて小学4年生・5年生・6年生を対象とした質問紙調査を実施した長根 (1991) は、その結果から学業成績と友達関係が最も大きなストレスの要因であると報告している。

また、酒井 (2007) らは、学校不適応に関する調査研究の中で、首都圏 (ある自治体) の公立小学校から中学校 (公立中学校・国立私立中学校) への進学=移行期に関する調査 (小学校6年生時に1回、中学校1年生時に2回、主に「学習意欲」・「対教師関係」・「級友関係」についての追跡パネル調査を行っている。酒井 (2007) は、国立私立進学予定者は、学校の学習には否定的でありながら、学習そのものには積極的であろうとする構えを持っていること、同時に、自らの進路の選択を正当化するために小学校の教師へnegativeな評価を下すという歪んだ認知構造が生成されている可能性が浮かび上がってきたと報告している。

確かに、現実場面においても、6年生は公立中学校へ

の進学か私立中学校への進学かの選択を迫られ、私立中学校への進学を希望する場合は、学習塾通いや家庭教師の利用など受験準備の厳しい現実に直面することになる。そして、学校や塾の成績の上下によって自尊感情も大きな影響を受けることになる。また、級友が、関係のあり方によっては、励まし慰め合う友であるとともにライバルともなる複雑な一面も持ち合わせる。

目 的

これらのことから、本研究では、児童期、特に発達段階の移行期にあたる小学校高学年の児童を対象として、教育活動の一環として愛他行動の実践が計画的、組織的に組み込まれている場合、その実践の多寡と、日常における愛他行動の出現頻度との関係について検討する。

また、公立校と私立校は教育方針や教育内容においても中学進学状況においても相違があるが、この校種の違いが高学年の児童の共感性に与える影響、及び愛他行動の出現頻度に与える影響について発達の観点から検討する。学校種別からの愛他行動の出現についての比較に基づく検討は、これまでの研究では見出すことができない。

方 法

研究協力者

兵庫県内の公立小学校4年生（男子：41名、女子：64名 計105名）、6年生（男子：51名、女子：40名 計91名）と、男女共学の私立小学校4年生（男子：56名、女子：47名 計103名）、6年生（男子：55名、女子：53名 計108名）の総計407名が本研究に調査の協力者として参加した。

材 料

児童用の共感性尺度、愛他行動尺度及び記述項目の質問紙を作成した。各項目は、全体に中学年相当の平易な言葉で表現した。

① 共感性尺度

共感性尺度は、浅川・松岡（1984）、桜井（1986）の共感性尺度の中から25項目を採用し、文末表現を一部変更して作成した。

回答は4件法とし、「はい」を4点、「どちらかといえば、はい」を3点、「どちらかといえば、いいえ」を2点、「いいえ」を1点とした。合計点は25点から100点の範囲とした。

② 愛他行動尺度

愛他行動尺度は、バス（1986）著の「対人行動とパーソナリティ」（大淵憲一訳1991）の中のRushton, Chrisjohn, & Fekken（1981）の愛他性尺度を参考にして、20項目からなる自己報告型の愛他行動尺度を作成した。

回答は4件法とし、「とてもよくある」を4点、「とき

どきある」を3点、「あまりない」を2点、「全くない」を1点とした。合計得点は、20点から80点の範囲であった。

③ 級友評定尺度

被調査者の学級の中で愛他行動の多い児童の出席番号を記入する方式を採用した。愛他行動の多い児童として級友の支持があった児童については、同一児童の番号の数を1点として合計し、その児童の級友による愛他行動得点（愛他行動級友評定尺度）とした。

フェイスシートには、質問紙調査の依頼文と回答方法を表記し、学年、出席番号、性別、家族数、兄弟数を記入する箇所を設けた。調査表は無記名としたが、級友評定で指名された児童が特定できるようにするために出席番号（学籍番号）の記入を採用した。

質問紙の作成にあたっては、全体形式、項目内容、表現についての確認及び修正を、大学院生4名、現職小学校教師2名に依頼した。

要因計画

- ① 愛他行動尺度の合計得点を従属変数として、2（4年、6年）×2（男子、女子）×2（公立校、私立校）の3要因の要因計画が採用され、この計画に基づき分散分析が実施された。
- ② 共感性尺度の合計得点を従属変数として、愛他行動の場合と同様の要因計画の下に分散分析が実施された。

手続

調査は、2007年2月下旬から7月上旬にかけて実施した。

調査にあたっては、各学級担任に、調査用紙の配布・回収、実施要領の説明及びクラス全児童の出席番号の児童への事前提示を依頼した。

結 果

愛他行動尺度

愛他行動尺度（20項目）は、過去の行為を問う内容であるので因子分析は行わず、20項目すべてを愛他行動尺度として採用した。（Table. 1）

得点は、20点から80点の範囲である。Cronbachの α 係数は、 $\alpha = .88$ であった。

愛他行動尺度の各項目と全体の相関

愛他行動尺度の各項目が愛他行動の内容に沿ったものであることを確認するため、全体と各項目間の相関係数を求めた。相関係数は、 $r = .39 \sim r = .68$ （全て $P < .001$ ）の間にあり、相関が高いことが示された（Table 1）。

愛他行動尺度と級友評定尺度との相関

本研究では、愛他行動についての自己報告の信頼性を確認するために級友評定との相関係数を求めた。有意な

正の相関 (Pearsonの相関係数 $r = .26, P < .001, N = 407$) が認められた。

愛他行動尺度と共感性尺度の分析

愛他行動と共感性との相関を調べるためにPearsonの相関係数を求めた。結果、愛他行動と共感性との間で $r = .55, P < .001$ の有意な相関が認められた。

共感性尺度の因子分析

共感性尺度の25項目について、主因子法を用いて因子分析を試みた。初期の固有値は、第1因子が25.70%、第2因子が6.72%、第3因子が5.80%であったので、1因子または2因子構造であろうと仮定した。

再び主因子法、Varimax回転によって因子分析を行った。因子負荷量が.35未満の項目を省いて2因子を抽出したが、下位尺度において適切な因子構造が確認されないため、Table 2のように共感性尺度は20項目からなる単因子構造とした。(Table 2) (R) は逆転項目である。

得点は、20点から80点の範囲である。Cronbachの α 係数は、 $\alpha = .88$ であった。

愛他行動の分散分析の結果

愛他行動得点を書く校種及び学年群・性別に整理したものがTable 3である。この表に基づいて、2 (4年, 6年) \times 2 (性) \times 2 (公立校, 私立校) の分散分析がなされた。

この分析の結果、「学年と校種」に有意な交互作用が認められたことから、単純主効果の検定を行った。4年生の群において私立小学校の得点が有意に公立小学校の

得点を上回っていた ($F(1,402) = 8.56, P < .01$)。また、私立小学校群において4年生の得点が6年生の得点を有意に上回っていた ($F(1,402) = 4.09, P < .05$)。(Figure 3)

また、性の主効果に関しては、女子の得点が男子の得

Table 2 共感性尺度 20項目 $\alpha = .88, N = 407$

No	項目	平均値	SD
1	遊び相手がいなくて一人ぼっちの子を見ると、かわいそうに思います	3.56	0.78
2	けがをして泣いている子を見ると、とても心配になります	3.60	0.72
3	大がかりな道でかくで歩いている子を見ると、かわいそうに思います	3.05	1.06
5	分らない時どうすることも、おもしろいと思います (R)	3.49	0.91
6	悲しい顔をしないで泣き止むのは、くせなことです (R)	3.60	0.78
8	プレゼントをもらってうれしそうに遊んでいる人を見ると、自分までうれしくなってしまうことがあります	2.91	1.07
9	泣いている子を見て、自分まで泣きたくなるようなことがあります	2.44	1.17
10	テレビで、地震の被災地の様子が映ると、私共助けてあげたいと思います	3.18	0.91
12	人が笑っているのを見ると、理由がわからなくても、自分まで嬉しくなることがあります	3.23	0.95
13	悲しいドラマ(けが)を見て、泣いてしまうことがあります	2.87	1.21
14	けがをした動物を見ると、かわいそうに思います	3.61	0.75
15	おもしろいゲームや本をよんで、悲しくなってしまうことがあります	2.43	1.15
16	偉人(野口英世・キュリー夫人など)の伝記を読んだら、私も偉い人になりたいと思います	3.09	1.00
18	友達が泣いている人は、友達が泣いてくれるのが嫌いです (R)	3.45	0.91
20	友達が泣いているのをみたら、その前一人で全部食べてしまうことがあります (R)	3.32	0.96
21	身長の長いお年寄りを見ると、かわいそうに思います	3.39	0.85
22	おもしろいゲームをしても、私には面白くない (R)	3.39	0.85
23	友達が泣いているのを見ると、腹が立ちます	3.40	0.91
24	小さい子ばかり泣くと、かわいそうに思います	3.07	1.10
25	リズムに乗って体が動かしそうな曲を聞くと、楽しい気持ちになります	3.48	0.83

Table 3 愛他行動の合計得点の平均値とSD

校種	学年	性別	平均値	SD	N=407
私立小	4年	男子	50.84	10.82	56
		女子	54.72	9.15	47
	6年	男子	49.15	11.44	55
		女子	50.40	9.62	53
公立小	4年	男子	44.90	12.69	41
		女子	51.28	9.83	64
	6年	男子	47.98	11.38	51
		女子	50.45	10.35	40

Table.1 愛他行動尺度 20項目 $\alpha = .88, N = 407$

$r =$ 全体と部分との相関

No	項目	平均値	SD	r
1	知らない人に道を教えてあげた	2.32	0.91	.40
2	慈善活動 (例、引根募金・震災の被災者のためなど) に献金をした	3.06	0.93	.42
3	慈善活動に日用品や衣類を寄付をした	1.64	0.86	.48
4	慈善活動のボランティア活動をした	1.77	1.02	.39
5	見知らぬ人の持ち物 (本や荷物など) を持ってあげた	2.00	1.08	.68
6	知らない人のために、エレベーターのドアを開けて待ってあげた	3.30	0.95	.47
7	並んでいる列で、急ぐ人に順番をゆずった	2.67	1.04	.62
8	慈善活動のねらいに賛同したので品物を買った	1.63	0.85	.40
9	落ちていただまの靴を靴箱に入れてあげた	2.56	1.06	.62
10	お年寄りや体の不自由な人が道を横断するのを手伝ってあげた	1.99	1.04	.67
11	バスや電車の中で、お年寄りや体の不自由な人に席をゆずった	2.99	1.01	.61
12	転んだ子どもを起してやった	2.50	1.03	.63
13	道路に飛び出そうとする子どもを止めた	2.06	1.03	.60
14	休んだ友だちのためにノートをとったり、見せてあげたりした	2.82	1.02	.53
15	いも物もらったときは、友だちや兄弟にも分けてあげた	2.95	1.01	.54
16	けがをしたり気分が悪くなった人を保健室に連れて行った	3.13	0.94	.57
17	病弱になった家族の看病をした	2.84	1.03	.58
18	仲間はずれにされている友だちを遊びにさそった	2.77	0.96	.62
19	悪口を言っている人や、いじめられている人をかばった	2.74	0.97	.59
20	けがをした友だちに頼まれて、代わりに掃除などの仕事をした	2.34	1.00	.59

P<.001

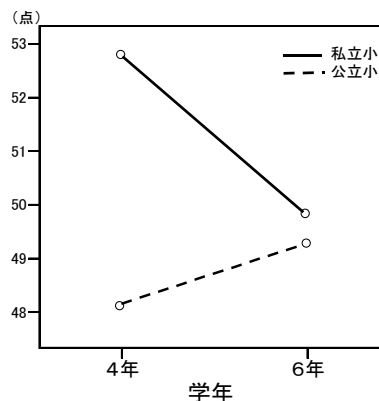


Figure 3 愛他行動の合計得点の平均値

点を上回るという内容であった ($F(1,402)=10.64, P<.01$)。

これらの結果から、私立小学校群の児童が公立小学校群の児童より愛他行動を多くとっていること、私立小学校の中でも4年生が6年生より愛他行動の頻度が高いことが明らかになった。また、男女間で比較すると、公立小学校、私立小学校を問わず女子の得点が男子の得点より高く、愛他行動の頻度が高いことが示された。私立小学校の6年生女子については、公立小学校の6年生女子と同じ程度に愛他行動が減少していた。その他、6年になると男女とも私立小学校、公立小学校の得点差が少なくなるということ、私立小学校の4年生男子児童と公立小学校の4年生男子児童の差が著しいことも明らかになった。

共感性の分散分析の結果

共感性得点を従属変数として、2学年（4年、6年）×2性別（男子、女子）×2校種（公立校、私立校）の分散分析を行った。（Table. 4）

分析の結果、「学年と校種」の交互作用が有意であったため、単純主効果の検定を行った。公立小学校の6年生の得点が、私立小学校の6年生の得点より有意に高く ($F(1,402)=4.60, P<.05$)、また、私立小学校の4年生の得点と同じ私立小学校の6年生の得点より有意 ($F(1,402)=8.17, P<.01$) に高かった。（Figure. 4 参照）

また、「性」の主効果の内容については、女子が男子の得点を有意に上回るというものであった ($F(1,402)$

$=62.93, P<.001$)。

「学年」の主効果にも境界的な有意が認められた。4年生の得点が6年生の得点を優位に上回る有意が示された ($F(1,402)=3.10, P<.10$)。

以上の結果、女子が男子より得点が高いことから、先行研究の結果は支持されたと言えよう。また、公立小学校の4年生と6年生の共感性得点の差が少ないことに比べて、私立小学校の6年生の共感性得点が男女とも4年生と比べて低下していることが明らかになった。

考 察

愛他行動の発達的变化

私立小学校の児童の方が公立小学校の児童より愛他行動の得点が高いという結果から、私立小学校独自の建学の精神と伝統的な校風が影響している可能性が示唆された。たとえば、ミッションスクールにおいては、宗教的な奉仕は、創設の基本的な在り方として日常の学校生活全般（特に、授業の中や学校行事の中）に組み込まれ、保護者の教育支援活動も含め、計画的、組織的な教育が行われている。私立小学校の児童が、公立小学校の児童より救援活動や寄付活動の体験が多いことが、一般的である。私立小学校では伝統的に実施されていることから習慣化し、他の愛他行動にも転化しやすいとも言えよう。このことは、たとえば、私立小学校の4年生男子と公立小学校4年生の男子の差となって表出しているとも解釈できよう。

また、校種に関わらず性別に有意な差がみられ、女子の愛他得点が男子の得点より高かった。性別に差が認められないとの先行研究が多いことからすると性差が認められたことの意味は大きいといえる。しかし一方では、川島（1991a,b）や広田（1995）の知見をもとに考察すると、愛他行動の種類によってその現れ方は異なると考えられる。本研究の尺度の質問項目が小さな親切行動や思いやり行動、寄付行動を中心とした構成であるので、女子の方が男子より行動しやすいという傾向が得点に表れたとも考えられる。もし救助行動に関する項目数を多くすれば、川島（1991a）の研究結果にあるように高学年男子が女子より得点が高くなるかもしれない。しかし、質的に高い実践についての質問を組み入れて構成したとしても無回答も多くなり、本研究の意図から外れることが予想される。したがって、発達段階を考慮し、小学生の日常行動の中から実行可能な愛他行動を選び出した本尺度項目は妥当といえる。ただし、項目の例示内容や表現については、今後も検討の余地はあろう。

学年に関係なく女子の愛他得点が男子の得点より高かったことについては、いくつかの理由が推測できよう。例えば、親は、幼児期から女子に対しては「優しく」、男子に対しては「遅しく」と育てる傾向がある。つまり、

Table 4 共感性の合計得点の平均値とSD

校種	学年	性別	平均値	SD	N=407
私立小	4年	男子	61.70	12.25	56
		女子	70.55	7.37	47
	6年	男子	58.55	12.13	55
		女子	66.02	8.29	53
公立小	4年	男子	60.68	10.61	41
		女子	68.81	7.14	64
	6年	男子	62.18	10.33	51
		女子	68.05	6.72	40

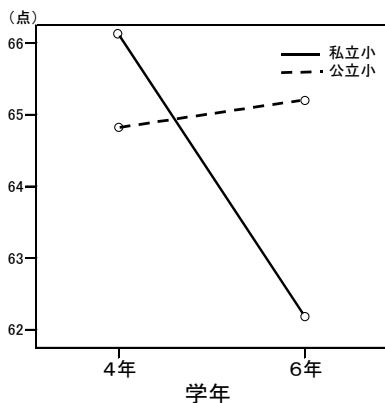


Figure 4 共感性の合計得点の平均値

女子は愛他的行動をとることを伝統的に男子より多くしつけられていることも考えられる。加えて、成長段階も男子より早熟であること（江口・安里・川島, 2003）、共感性との関連からみた場合、女子の方が男子より共感反応が高いことも影響しているのではないかと考えられる。これらのことから女子は、小さな親切や思いやり行動のような比較的実行しやすい行動の頻度が高いとも考えられる（川島, 1991）。

共感性の発達の变化及び学校間の差異

愛他行動との関連でいえば、私立小学校は日常の社会的場面での向社会的行動が多いことから、彼らの内面に共感性や愛他性が醸成されていると考えることもできる。しかしながら、本結果によれば、この見解とは逆に公立小学校児童に比べて私立小学校の児童の共感得点は有意な差は見られなかったものの、6年生では顕著に私立小学校児童の得点が低落していた。学校間の差異についていえば、公立小学校と私立小学校の違いを特徴づけるものは、私立中学校受験を目指す児童の多寡である。すなわち、公立小学校群に比べて私立小学校群のほうが、私立中学受験を目指す児童が多い。この点から考えるならば、中学受験に際して、児童はそれぞれに競争意識を高めるがために、他者への思いやりや配慮が弱化するにいたることが考えられる。私立小学校では、公立中学校への進学は少なく多数の児童が私立中学校への進学を志望するのが現状である。その時自校の系列中学校への進学を希望している児童に対して、外部の私立中学校への進学を志望する児童は激しい受験競争を体験することになる。学習塾ではテストの成によって習熟別のクラスに振り分けられるが、そのクラスも固定的ではなく、爾後のテスト成績でしばしばクラス移動が行われる。したがって、成績のよい児童であっても常に下降の不安を抱え、強いストレスから日常的な対人関係にも余裕がなくなる。この観点からすれば、競争意識の上昇が他者への愛他性や向社会的行動を減じることに繋がると仮定することも可能であろう。

他方、性差や学年差については従来の研究（例えば、浅川・松岡, 1984）を、支持するものであった。

愛他行動の抑制と促進

以上のことから、私立小学校の4年生の共感性、愛他行動の得点が高いことは、学習塾での受験準備の厳しさが本格化するのが5年生当初からという現状をみると、強い心理的ストレスを受ける前の状態と解釈することができよう。一方、同じ私立小学校の6年生の共感性が低下した状態は、学校の学習と受験準備における塾の学習の二重化の影響（酒井, 2007）と考えられる。つまり、中学受験のような厳しい競争や級友関係における心理的ストレス（長根, 1991）は、他者志向を減退させ自己都合を優先させる状態を醸成して、愛他行動のような良行

動を抑制する方向を強めると推測できよう。

このことから愛他行動は加齢とともに直線的に上昇するとは言えず、状況要因の強い負荷によっては、共感反応の低下を引き起こし、連動して愛他行動は低下する可能性があることが示唆されたと言えよう。

他方、本結果において、日常の教育活動に愛他行動の実践が組み込まれている私立小学校の児童の得点が公立小学校の児童より高い得点を示したことは、実践の学習効果によって日常的に愛他行動の頻度が増す可能性を示唆するものである。

このことと松井（1991）の愛他行動を学校教育の中で教えることの重要性の主張やEisenberg（1992）のサンフランシスコ地域の「児童発達プロジェクト」の実践効果に関する見解をも含めて考えると、児童の発達段階を考慮した愛他行動プログラムを学校教育の中に導入することは、愛他行動促進の方略として意義深いといえる。

【 今後の課題 】

Eisenberg（1992）が、学校を基礎とした介入計画は向社会的な反応や協力を高めることがはっきりしている現状、効果的な要素だけを含むように合理化されるべきであると述べているように、今後、愛他行動の促進を図るためには、学校教育の担う役割が家庭教育と同様に重要性を増すと考えられる。プログラム作成に当たっては、これまでの道徳教育、宗教教育という枠組みとの関連、及び整理も必要になってこよう。

また、発達段階の過渡期において、中学受験のような心理的に強い影響を与える要因以外の要因の有無についての研究や、それらの影響を少しでも軽減できるような研究は有意義である。

さらに、6年生で低下した共感性は、その後回復したのか、それとも低下した状態のままなのか、あるいは消失してしまったのかについても、中学校、あるいは高等学校に及ぶ縦断的な追跡調査が実施されるなら、新たな知見と研究課題が得られる可能性が高い。

引用文献

- 浅川潔司・松岡砂織 1984 共感性に関する発達の研究. 兵庫教育大学研究紀要, 3, 97-105.
- 浅川潔司・松岡砂織 1987 児童期の共感性に関する発達の研究. 教育心理学研究, 35, 231-240.
- Bryant, B.K. 1982 An index of empathy for children and adolescents. *Child Development*, 53, 413-425.
- Eisenberg, N. 1982 The development of reasoning about prosocial behavior. In N. Eisenberg (Ed.), *The development of prosocial behavior*. (pp.219-249). New York: Academic Press.
- Eisenberg, N. 1986. *Altruistic emotion, cognition and*

- behavior. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Eisenberg, N. & Mussen, P. 1989 *The roots of prosocial behavior in children*. Cambridge University Press. 菊池章夫・二宮克己（共訳） 1991 思いやり行動の発達心理. 金子書房.
- Eisenberg, N. 1992 *The caring child*. New York: Harvard University Press. 二宮克己・首藤敏元・宗方比佐子（共訳） 1995 思いやりのある子どもたち—向社会的行動の発達心理学—. 北大路書房.
- 江口知子・安里勝人・川島和夫 2003 貸与行動における向社会的判断と愛他的判断. 信州大学教育学部紀要, 108, 91-99.
- Feshbach, N. D. 1976 Empathy in children: A special ingredient of social development. (paper given at the Western Psychological Association Meeting, Los Angeles, April.)
- 広田信一 1995 教室における自発的愛他行動の観察的研究. 教育心理学研究, 43(2), 213-219.
- Hoffman, M.L. 1975 Altruistic behavior and parent-child relationship. *Journal of Personality and Social Psychology*, 31, 937-943.
- 井上信子 1986 児童の自尊心と失敗課題の対処との関連. 教育心理学研究, 34, 10 - 19.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析. 教育心理学研究, 39, 182-185.
- 酒井朗・青木紀久代・菅原ますみ（共著） 2007 子どもの発達危機の理解と支援—漂流する子ども— お茶の水女子大学21世紀COEプログラム 誕生から死までの人間発達科学. 第3巻, 金子書房.
- 桜井茂男 1986 児童における共感と向社会的行動の関係. 教育心理学研究34, 342-346.
- 首藤敏元 1985a 幼児の愛他行動に及ぼす理由づけの効果. 教育心理学研究, 33(3), 243-247.
- 首藤敏元 1985b 児童の共感と愛他行動：情緒的共感の測定に関する探索的研究. 教育心理学研究, 33(2), 226-231.
- 首藤敏元 1994 幼児・児童の愛他行動を加藤美帆 2006 国・私立中学進学者の家庭の教育戦略と公立小学校への意識. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 別冊13号2, 23-32.
- 川島一夫 1991b 児童の愛他行動における動機の発達. 日本教育心理学会, 第33回総会発表論文集, 117-118.
- 川島一夫 1991a 愛他行動における認知機能の役割：その状況要因と個人内要因の検討. 風間書房.
- 菊池章夫 1983 展望向社会的行動の発達. 教育心理学年報, 23, 118-127.
- 松井洋 1991 青年期における愛他行動の発達とその規定因. 川村学園女子大学研究紀要, 2, 181 - 193.
- Mussen, P. & Eisenberg, N. 1980 *Roots of caring, sharing and helping: The development of prosocial behavior in children*. Freeman. 菊池章夫（訳） 1980 思いやりの発達心理. 金子書房. 規定する共感と感情予期の役割. 風間書房.

謝辞：本研究の遂行にあたって、多くの小学校の児童や教職員の皆様のご協力を賜りました。ここに記して衷心より感謝申し上げます。